

研究論文

ニュースから見た台湾の「人肉搜索」に対する意識

周 典芳*

I. はじめに

台湾ネット情報センター (Taiwan Network Information Center, TWNIC) の調査¹によると、2013年時点で、ネットユーザーは、人口の77.09%を占めている。アジアでは、韓国(82.5%)日本(79.5%)の次に、三番目となる。スマートフォンの普及によって、Wi-Fiや無線ランを利用するのも2011年より11.9%増えた。ソーシャルメディアの利用も、情報検索やメール送受信より、大幅に増加した。

BlogやFacebookなどのソーシャルメディアが流行している現在、ネット上のなんらかの情報を手係りに、ある人物の個人情報を見つけ出すのはさほど難しいことではない。ネット利用者たちが、掲示板などを使って、特定の人物の身元や私的な情報を収集し、公開するといった行動が、中華圏では「人肉搜索」(Human Flesh Search)と呼ばれる。ここでいう「人肉」とは、「人力」あるいは「人工」といった意味だ。詳しく言えば、特定人物の名前、年齢、就職先、住所などの個人情報を複数人でネット上に提供し、膨大な情報から検索したり、特定人物周囲の者からの情報提供を呼びかけたりして、公開してしまうのである。

「人肉搜索」は、普通のネット上の争いから生じたことではなく、大きく二種類に分けられ

る。一つは、警察が事件の容疑者を追跡する時などに、ネットで情報提供を呼びかける。そして、ネットでそれを目にした人たちが協力する。もう一つは、法律で裁かれるレベルではないかもしれないが、道徳的、倫理的に反する事(たとえば、動物虐待、交通規則違反、親不孝、不倫)を行った者に対して、制裁を課すため、或いはその者の所属する組織へ告発するために、「人肉搜索」を行う。後者は、最近台湾で頻繁に起こり、しばしば話題となって、メディアに取り上げられた(周、2011)。

2011年11月『親子天下』という雑誌の調査結果²によると、57%の中高生は、他人のよくないと思う行為を見かけると、携帯で撮影して、ネットにかけて、不特定な他人に人肉検索させることに同意する。僅か20%の人が反対する。つまり、インターネットやソーシャルメディアの普及が「人肉搜索」を可能にした。

台湾において、「人肉搜索」に関する研究は、プライバシー問題とそれに関する法律から論じるのが一番多い。最近では、ネット上の集団活動を探求する研究が増えてきた。たとえば、方正璽、林芳羽(2010)は「人肉搜索」をネット上の暴力だと指摘する。張俊培(2011)は「人肉搜索」をゲームと似ている楽しみを持ち、参加者は帰属感と能動性を感じるので、多発すると解釈する。吳裕勝(2011)と袁涵玉、陳百零

*台湾慈濟大学コミュニケーション学科准教授

(2013)は「人肉搜索」を正義に対する期待から生じる見張りであると解釈する。つまり、今まで「人肉搜索」に関する研究は、「法律の面の規制」と「行動の意味と影響」二つの側面から論じるのが中心であったが、本稿では、「人肉搜索」が多発する台湾社会において、それをどう評価するのかについて、探求しようとする。

そもそもニュースは価値観を含む。鏡のように事実を映すというよりはむしろ、作られたものである。その作り方は、記者のおかれた社会的文脈と組織環境によって決められる(Jensen K.B., 2002)。したがって、ニュースの内容を分析してみれば、その社会的文脈を探求できる。ニュースに含まれた意識も、しばしば主流的な価値観に呼応する(Gans, 1979)。本稿は、ニュースに含まれた意識が、その社会の主流的な価値観に反映できるという考えに基き、この数年間、台湾で話題となった「人肉搜索」に関する事件を呈示し、それに関する報道の仕方を通して、台湾における「人肉搜索」行動に対する共通の意識を探求したい。

Ⅱ. 「人肉搜索」について

「人肉搜索」はいつ頃から生じた現象だろうか？ 始まりの時期を確定するのは難しいが、林奇秀(2011)のまとめによると、中国では、2001年頃に始まったと推定できる。2006年2月に、ある女性が自分が履いているハイヒールで子猫を潰し殺した。その写真がネットに流された。その動物虐待事件を見過ごせないネット利用者たちが、写真の背景と人物を情報源とし、子猫を虐待した女性の身元を協力的に探し出そうとした。これは最初の「人肉搜索」行動ではないかもしれないが、話題となって、注目された始

まりである。その時使われたサイトは「猫撲」(MOP)というサイトであった。2006年に猫撲は「人肉搜索」専用の掲示板⁴を設置し、それによって「人肉搜索」が急激に増えてきたと考えられる。中国では2001年から2007年の7年間におよそ31件あったが、2008年から、百を超えるようになった。1/4の人肉検索事件が全国で注目され、話題となった。2008年に「中国青年報」が2491人を対象に行ったネット調査⁵によると、58.7%の人が「人肉搜索」のことを知っている。13.2%の人が「人肉搜索」に参加したことがある。この数字からみれば、人肉検索は、中国でたまに生じる事件では決してなく、平均三日に一回の頻度で起こる。半分以上の人がこのようなネット検索行動について知っていて、一割以上の人が経験者であることになる。さらに、猫撲「人肉搜索」専用掲示板に、「人肉搜索」について、「ネット利用者の知恵と力を合わせて、質問や問題解決において助け合える。国家の法律や道徳の基本に従った上で、利用してください。」と書いてある。要するにサイト側は人肉検索を「問題解決のための助け合い」とであると定義した。

メディアの利用と満足(use and gratifications)の視点からみれば、ネット利用者が積極的に自ら人肉検索行動に参加するのは、自分の欲求を満たし、楽しみを感じるためと考えられる。張俊培(2011)は、台湾で「人肉搜索」の経験者にインタビューした結果、「人肉搜索」はゲームと似ているような楽しみを持つと主張した。なぜかということ、ネットでいろいろな情報を集め、その中から意味を持つ情報を選別していくのは、謎やパズルを解くような感覚である。さらに、解いた時に得られる快感は探偵のそれに近い。そして、ネットに集まった人肉搜索参加者たちは、自主的に仲間に入ったので、帰属感

と能動性を感じることができ、また、人肉搜索という行動は、目的と目標がはっきりと決まっているため、その目標に沿ってみんなと同じ行動をするだけで、共感共鳴を得られやすい。その上、人肉搜索は他人を覗くことに近く、覗きによる刺激と快感も得られる。最後に、人肉検索の目的は、不正なことをした人物に対して制裁を課すためなので、その人物を大勢のネット利用者と一緒に指摘することによって、自分が正しいという正義感を感じることができ、たとえ、他人の情報を晒す不安や罪悪感を感じても、このポジティブな自己意識に勝つことはできない。さらに、共同作業のために、犯罪意識も希薄になってしまう。

Ⅲ．中華圏で「人肉搜索」が多発する理由

確かに「人肉搜索」は、中華圏に限って発生することではない。韓国や日本において似たような事件があった。たとえば、2005年7月、韓国で「Dog Poop Girl」事件があった。地下鉄の車内で飼犬がウンチをしたのに、それを放置した女子大生に対し、多数のネット利用者がそれを見過ごさずに、ネット上で批判し、個人情報まで公開された。2012年11月には日本でも、似たような事件が発生した。それは「逗子ストーカー殺人事件」である。報道による⁶と、事件前、容疑者がネット利用者に依頼し、被害者の自宅の詳しい住所を割り出そうとする書き込みがネットの質問コーナーにあった。

確かにネットやソーシャルメディアが普及した社会において、他人の個人情報をネットで公開するケースは世界各国にもある。しかし、中国や台湾と比べると頻度はかなり少ないのだろう。たとえば、イギリスのBBCは、「人肉搜索」を「human flesh search engine」と訳す。アメリカ

力はさらに「Chinese style internet man hurt」という用語で「人肉搜索」を表現する⁷。要するに、「人肉搜索」は中国式の人探しだといえよう。しかし、なぜ、中華圏に頻繁に起こるのだろうか？侯政男、蔡宗哲（2013）によると、厳しいネット言論統制を強いている中国において、ネット利用者は政治に関わる議題を警戒する傾向が見られるが、過ちを犯したと思われる人物を見出すのは、理性ではなくても、検索のプロセスの中、自分に力があると感じられるからこそ、「人肉搜索」が頻繁に行われる。

それではなぜ、ネット上の言論統制を行わない台湾においても、「人肉搜索」に違和感を持たないのだろうか？台湾はどちらかということ、集団主義社会の傾向が強い（Hofstede, 1983）、ある者が道徳的、倫理的に反する事をする、それを知った第三者の中から、反感を抱き、その事を世に問い、糾弾しようとする者が現れる。「人肉搜索」はその糾弾の一手法とも考えられる。

さらに、文化背景から、台湾のネット利用者が「人肉搜索」に比較的違和感を持たない理由を考えてみよう。中華文化の中に、儒教思想の基本として、「差序格局」の「関係主義」がある。簡単にいえば、序列を大事にする人間関係である。これは儒教思想の「尊尊」と「親親」による相互作用のルールである（費孝通、1948）。この人間関係の特徴から考えれば、社会規則に反する事をした人がもし身内なら、身近に感じ、当事者の気持ちをより配慮することもできる。しかし、もし見知らぬ他人であれば、遠い存在と感じる。したがって、他人の過ちを批判する時、自分との関係によって違ってくる。要するに、他人の過ちや社会規範を破ることを平等的に評価するアメリカの大学生と比べると、台湾の方は、自分との関係に基づいて、

その過ちを非難する傾向がある。つまり、同じ過ちだとしても、赤の他人を、自分の親類や友人よりも、重く非難する傾向がみられる（黄光國、2005）。

IV．台湾における「人肉搜索」の報道

本稿では、2010年から2013年の間に、テレビニュースに報道された異なる種類の三つの「人肉検索」の例を対象とする。その三つの種類の「人肉検索」の報道に共通的な意識を見出そうとする。

2010年、クリスマスイブの新北市で、あるドライバーが86才の患者を搬送中の救急車の進路を意図的に妨害、結果その患者が死亡するという事件があった。この事件は、一週間も経たないうちに、ネット利用者が自由に書き込みできるフリー百科事典ウィキペディア（Wikipedia）に掲載され、このドライバーの名前、生年月日、所属大学、サークルはもちろん、親族の名前と経歴までが公開された。

事件を起こしたドライバーの親が、テレビトークショーにコールインして、息子の状況を説明しようとした。親の話によると、ドライバーは鬱病のため、救急車のサイレンの音を聞くと、パニック状態となったから、救急車の進路を妨害した。そのため、多くの人の反感を招き、ドライバーのFACEBOOKに荒しをしにいくようになった。

以下は上記の事件に関するニュースである。ほぼ全てのテレビ局で報道されたが、今回選んだのは、台湾の地上波放送の「民視」テレビ局（Formosa TV Station）のニュースである⁸。

アナウンサー：台湾大学博士課程に在籍している学生、このまえ、進行中の救急車を

妨害して、お年寄りの患者が遅延のために、病院に到着前になくなりました。ネット利用者たちは「人肉搜索」によって、このドライバーの身元を見出しました。さらに、最近同じ大学の人たちの中で、このドライバーは、昔女性後輩と先輩に、セクハラ行為をしたことがある、とうわさが流れています。

記者：24日の夜、救急車がサイレンを鳴らしながら、全力を尽くして、86才の女性患者の命を救おうとしている時、このオレンジ色の車のドライバー、救急車に中指を出して、わざとブレーキをかけた。ネット利用者たちの「人肉搜索」によって、ドライバーの身元が判明した。彼は台湾大学で歴史を専攻し、博士課程に在籍しています。大学側のアシスタントも、この事件を起こしたのが、同大学の学生であることを、意外な展開だと感じている。

インタビューされた大学の人：もちろん、びっくりしました。残念だと思います。ひとつの命がなくなりました。彼はもう30才を過ぎています。もし、法律的な責任能力があれば、おそらく、自分で対応しなければならない。

記者：父親の話によると、彼は心身症を患っているらしいですが、……

インタビューされた大学の人：学校生活に限って言えば、われわれは彼のそのような状態を見たことがないです。

記者：33才、台湾大学歴史学博士課程に在籍中の蕭くんは、口頭試験を通ると卒業できます。今このような事件を起こして、大学側も連絡することができない。

記者：しかし、ネットで自称後輩の人が流し

た情報によると、蕭くんは昔女子学生にセクハラや盗撮したことがある

記者：学校での評判はどうですか？何か聞いたことがありますか？

インタビューされた学生：女性先輩や後輩をセクハラしたことがあるって、そういうふうに聞きました。

記者：今、蕭くんの身元が明らかにされた。彼に関する情報はネットで流れている。Facebook で非難する人数は十万を突破した。この高学歴の知識人は、道徳に不合格からだ。

上記の報道を見ると、ポイントは「救急車妨害の悪質さ」、「人肉搜索に参加した人数」、「人肉搜索によって得たドライバーの個人情報」、「ドライバーの所属大学の非難的なコメント」及び「ドライバーに関する悪い噂」などに集中する。「人肉搜索」によって、ドライバーの個人情報をネットに公開することは、この人を社会的に抹消することに近い。しかし、これは過ちに相応する仕置きであろうか？しかも、ネット利用者が仕置きを行うのは、適切であろうか？報道では、「人肉搜索」の良し悪しについては何も議論されなかった。

2012年11月、運転中のバスに、四才児に席を譲らない乗客を、携帯で撮影して、ネットにアップロードしようとする母親がいた。この事件も報道されて、議論された。台湾の地上波放送の「華視」テレビ局(TBSCTS, Taiwanese Broadcasting System: Chinese Television System)は、以下のように報道した⁹。

アナウンサー：次のニュースは、あるお母さんからの告発である。皆さん、バスや地下鉄に乗る時に、子供に席を譲りませ

か？このお母さん、四才の子を連れて、バスに乗った。結局、誰も席を譲ろうとしなかった。このお母さん、携帯を出して、その場面を録画した。そうしたら、なんと乗客に、四才児に席を譲る必要があるの？と質問されました。

記者：揺れてるバスで、すべての座席が満員となる状態。めがねを掛けている男の子、小さい手で手すりに掴まって、揺れていた。座っていた乗客はみんな知らん振りをして席を譲ろうとしなかった。

母親：人がこんなに多く、誰も席を譲ってくれない。この場面を撮影して、YOUTUBE にUPする。あなた何歳？

子供：四才。

記者：見過ごせない母親は、携帯で、乗客の冷たさを録画した。後ろに青い服を着ている男性、顔を隠したりして、結局我慢できずに、怒りが爆発した。

男性：何を撮影しているの？こんな年の子供に席を譲る必要があるの？

記者：席を譲らないのに、挑発的な発言までした。この画像をネットにUPすると、多くの人の反感を買った。

男性：普通なら、席を譲るでしょう。こんな発言はしないと思う。

女性：まだ小さいから、席を譲るべきだと思う。

記者：バス会社の運転手さんに聞くと、すべての運転手さんは、安全のために、運転する前に、乗客全員に席を譲ることを呼びかけます。

バス運転手：優先座席に座っている方、お年寄りや体の不自由な方、妊婦や子供に、座席をお譲りください。

記者：優先座席のところ、このようなシー

ルも貼り付けています。確かに、席を譲るかどうかが、法律で決めてない、真心からの行動である。しかし、もしこの子があなたの家の子供で、揺れているバスの中で、転んで怪我をしたら、どう思いますか？

長崎の路面電車でも、「全席優先座席」と書かれたシールが窓に張ってあるが、席を譲るかどうかが、本当に細やかなことである。2009年のネット調査によると、台湾では七割の人は座席を譲る¹⁰。2013年5月に、指定席以外の車両に、優先座席を15%以上設置すべきだという「身心障害者權益保護法」が制定された¹¹。確かに座席を譲るのは、良いことである。しかし、個人のプライバシーより重要であるとは考えにくい。このニュースの報道の仕方から見れば、報道の内容は、やはり「席を譲ることは当たり前的美徳」、「席を譲らない人は、写真を撮られても、反論する資格がない」、「世間の冷たさ」の三つである。要するに、席を譲らないと、顔付きの映像を公開されても、文句は言えないのである。

顔付写真をネットに公開されても、不特定な人は見ても誰が分からずに、すぐ忘れるかもしれない。当事者の親族と身内は忘れようとしても、忘れられない。名誉というのは、人間関係の基本である。名誉に傷が付くと、これからの社会生活を送りにくくなってしまふ。一度ネットに公開された情報は、完全に削除するのは、不可能に近い。この事件の報道の仕方からみれば、やはり四才児に席を譲らない乗客を指摘している。撮影され、公開された乗客のプライバシーの侵害については、何も取り上げなかった。

2013年に、ある女子大生が台湾で一番大きな

掲示板 BBS サイト¹²に、別れた彼氏との恋のトラブルを書き込んだ。内容には借金、中絶、怪我、自殺などが含まれていた。アツという間に、元彼に対する辛辣な批判と非難のメッセージが溢れた。これについて、台湾のケーブルテレビ局、中天テレビ (CTITV) は以下のように報道した¹³。

アナウンサー：この間、新竹のある女子大生が、元彼に弄ばれたことを掲示板に書き込むと、一日も満たないうちに、人肉検索によって、元彼の個人情報が名前、学校、所属学部など、ネットで公開されました。それだけではなく、罵った内容を書いた紙が元彼が住んでいる寮のドアに誰かに貼り付けられた。

記者：灰色のコートを着て、右手を犬のケージに乗せて微笑んで。一見無邪気な男性に見えるが、女性を騙した悪質なマザコン男だと、元彼女によってネットで周知されました。台湾で一番人気のある掲示板には、キャンパス純愛物語という文章が、最近、ものすごく人気があった。この文章は、ある女子大生が恋の辛さと、切なさを涙ながらに書いたものです。ネット利用者たちは盛り上がった。「執着をやめよう」、「彼のために自殺するのはばかばかしい」などと、いろいろとアドバイスした。

記者：多くの人に非難されたみたいですね。

インタビューされた女性：指摘する必要がないと思う。他人ごとだから。

インタビューされた男性：80%は男性に問題がある。妊娠とか、傷を負うとか、このようなひどいことがあったから、男性が悔しく感じても、黙ってこれを受け入

れるべきだ思う。

記者：ネット利用者たちの罵声に対し、男性の方も掲示板で弁解しました。女性が酔い潰れた時に、一緒に車で台北の実家まで送った。彼女の自殺未遂を聞いた時も、すぐに病院に駆けつけた。しかし、ネット利用者たちは、彼の説明を受け入れない。

インタビューされた大学の人：これは恋愛トラブルだと判断します。すでに学校のカウンセラーに頼んで、カウンセリングを受けさせようとしています。

記者：学生たちの恋愛トラブルが注目を集めたが、大学側は余計なコメントはしたくない。しかし、ネットにUPしたこの文章は、話題となってネット上で盛り上がった。「人肉搜索」まで起動されて、個人情報が暴露されるに至る。ここまでの展開は、二人の主人公にとっても最初から予測も付かないでしょう。

上記の事件は、いままでのように社会規則に反する事をした人を糾弾しようとするケースではなく、私的なことをネットで公開し、別れた彼氏を「人肉搜索」の的にしたケースである。そもそも恋のトラブルは極めてプライベートなことで、当事者以外の人なら、割り込む余地さえない。ネット利用者が他人のプライベートなことに立ち入って、当事者の個人情報を公開し、リアルな生活に支障をきたさせるのは、プライバシーの侵害である。しかし、報道においては、依然として、「人肉検索」を批判することはない。インタビューをうけた通行人の女性が「指摘する必要がないと思う。他人ごとだから。」と言ったり、大学側が「これは恋愛トラブル」だとコメントしても、報道の重点はや

はり「男性の悪さ」と「ネットで盛り上がった人肉検索」に置かれたのである。自分のプライベートと別れた彼氏の個人情報をネットに公開した女子大生に対して、何も議論されることはなかった。

V. おわりに

本稿の目的は、この数年間、台湾で頻繁に起こった「人肉搜索」事件についての報道を検討することによって、それに対する社会共通的な意識を探り出そうとするものであった。今回2010年から2013年の間に話題となった異なる種類の人肉検索に関する三つの事件を対象として、それに関する報道を見た結果をまとめてみると、台湾ではやはり「人肉搜索」を「正義感による制裁行動」であるとする傾向が強い。したがって、今回選んだ三つの事件において、報道は「当事者の悪さ」、「人肉検索の盛況」と「非関係者の憤慨」に重点を置いていた。このような報道の仕方はまさに「人肉搜索」を正当化するものであった。韓国の「Dog Poop Girl」事件がアメリカにも流された後、プライバシー法専門のアメリカの学者、Solove (2007) はそれについて、当事者が犯した悪いことへの反応は適切だろうか？行き過ぎではないだろうか？などいくつかの興味深い問題を提起した。「人肉搜索」は、言うまでもなくプライバシーの侵害である。実名や身元に関する情報と共に、都合の悪い情報がネットで白日の下に晒されれば、被害者は有形無形の社会的制裁を免れないだろう。決して称賛されるべき行動ではないはずだ。しかし、台湾では「人肉搜索」が果たして「私刑」なのか、或いは「正義感による制裁行動」なのか、といった議論さえ、今回の報道には見られなかった。

台湾では2010年5月26日から「個人資料保護法」(個人情報保護法)が成立した。この法律によって他人の情報や写真を公表する場合は、事前に当人の許可を得ることが必要となった。しかし、立法院での再審議で、「新聞報道」と「公衆利益」に関わる問題については、当人の許可を得なくても、ネットなどに身元や写真を公表しても法律違反にはならないとされた。恐らく今後も、動物虐待、交通違反、公共施設損壊など、社会的に反感を招く事件に対し、ネット上で事件当事者の身元を暴き出す「人肉搜索」が頻発するだろうと思われる(周、2011)。

本稿では、中華圏で「人肉搜索」が多発する原因を文化的な要素から、解釈しようと試みた。確かに「人肉搜索」について考える際、このように文化的な要素を視点に入れるのは必要なことだろう。しかし、本稿の解釈によっても、答えられないのは、なぜ同じ儒教の影響を受けた韓国や日本で、「人肉搜索」が頻繁に起こらないのだろうかということである。そもそも文化はとても複雑なことで、いろいろな要素が絡み合っている。その中の一部を取り出し、研究者が期待する方向に向けて解釈するのは、難しいことではない。したがって、この点について、より緻密な比較や議論がなければ、答えることができないだろう。これからの研究にも文化的な側面からアプローチすることを期待したい。

被害者にも加害者にもならないために、今の情報社会において、どのような教育が必要なのだろうか? メッセージの特性として、パソコンの中に保存されたファイルは、転送、変造できるので、不特定な人に公開される可能性がある。また、一度ネットにアップロードした情報を完全に削除するのは不可能に近い。自分のプライバシーを大事にし、自ら守らなければならないという意識を身に付けなければならない。

そして、ネットから得た情報に対して、情報の信憑性を判断する力を身に付け、プライバシーを守りながら、コミュニケーションと人間関係を豊かにすることへと繋げていけたらよいだろう。

注

- 1 世界日報(2013年9月28日)「台湾上網普及率逾七成 七亞洲第三高」、
<http://www.worldpeoplenews.com/news/9/2013-09/42629>
- 2 天下網站2011教育特刊(2011)。「公民教育大調査出爐! 不一樣愛國觀、近5成年輕人 不願上戰場」、
<http://topic.cw.com.tw/2011edu/article/press1-1.aspx>
- 3 猫撲のサイト:<http://www.mop.com/>
- 4 猫撲の「人肉搜索」専用掲示板:
<http://dzh.mop.com/renrou>
- 5 中国青年報(2008年6月30日)「79.9% 公众认为应规范人肉搜索」、
http://zqb.cyol.com/content/2008-06/30/content_2243136.htm
- 6 神奈川新聞(2012年11月9日)「逗子女性刺殺事件: ネットで住所割り出し」、
<http://news.kanaloco.jp/localnews/article/1211090004>
- 7 経理人文摘(2009年8月3日)。「人肉搜索的別名: 网络追捕」、
http://digest.icxo.com/htmlnews/2009/08/03/1399977_0.htm
- 8 民視新聞(2010年12月28日)。「人肉搜索 網友找出擋車博士生」、
<http://www.bps1025.com/watch.php?vn=%E4%BA%BA%E8%82%89%E6%90%9C%E7%B4%A2+%E7%B6%B2%E5%8F%8B%E6%89%BE%E5%87%BA%E6%93%8B%E8%BB%8A%E5%8D%9A%E5%A3%AB%E7%94%9F%E7%BC%8D%E6%B0%91%E8%A6%96%E6%96%B0%E8%81%9E,-zRnVD66evek.html>
- 9 華視資訊(2012年11月12日)「4歲童搖晃搭公車 沒人讓座還嗆聲」、
<http://news.cts.com.tw/cts/general/201211/201211121140228.html>
- 10 波仕特線上市調網(2009年5月14日)「近七成民眾具備讓座好習慣」、
http://www.pollster.com.tw/Aboutlook/lookview_item.aspx?ms_sn=26
- 11 東森新聞雲(2013年5月31日)「防低頭族佔位, 博愛座比例不得低於15%」、
<http://www.ettoday.net/news/20130531/215668.htm>
- 12 「批踢踢實業坊」は台湾最大のBBSサイトである、
www.ptt.cc
- 13 中天電視(2013年10月15日)「女大生控訴負心漢, 男方遭網友圍剿」、
http://www.ctitv.com.tw/news_video_c14v144722.html

参考文献

- Gans, H. J. (1979), *Deciding What's News*. Vintage Books.
- Hofstede, G. (1983), *National Culture in Four Dimensions*. *International Studies of Management and Organization*, 13 (2), 46-74.
- Jensen, K. B. (2002), *A Handbook of Media and Communication research: Qualitative and Quantitative Methodologies*. Routledge.
- Solove D. (2007). *The Future of Reputation: Gossip, Rumor, and Privacy on the Internet*. Yale University Press.
- 周典芳「台湾でのネットいじめの実態と対策」加納寛子編(2011年)『現代のエスプリ』第526巻、ぎょうせい。
- 黃光國「華人的道德觀與正義感」楊國樞、黃光國、楊中芳編(2005年)『華人本土心理學』遠流出版社。
- 費孝通(1948年)『鄉土中國』鳳凰出版社。
- 方正璽、林芳羽(2010年)「網路上的暴力正義－人肉搜尋的現象與探討」『資訊與管理科學』第3卷第2号、資訊與管理科學期刊編輯委員。
- 林奇秀(2011年)「人肉搜索初探」『圖書與資訊學刊』第79卷、政治大學圖書館。
- 侯政男、蔡宗哲(2013年)「嚴格控制下的激情、監督與淡定：中國大陸網站人肉搜索行為之理論建構探討」『中華傳播學刊』第24卷、中華傳播學會。
- 張俊培『人肉搜索「遊戲」經驗之初探』世新大學新聞學研究所、修士論文、2011年。
- 吳裕勝「人肉搜索：資訊科技與監視社會共謀事件」中華傳播學會2011年會論文。
- 袁涵玉、陳百零「由人肉搜索事件看網路集體行動：情節、角色與協力的尋人行為」中華傳播學會2013年會論文。